36.『女帝　小池百合子』

最近出版された『女帝　小池百合子』（石井妙子著）という本を読んだ。３年半にも及ぶ綿密な調査に基づくという記述は、文章力もあって読む人を納得させ、次はどうなるのかという興味を起こさせ、一気に読みたくなる本である。

小池百合子に関する本は、２年程前に『小池劇場の真実』（有本香著）というのを読んだことがある。小池が提起した豊洲移転問題や東京オリンピックの予算見直しなどで大騒ぎをしたことを検証・批判する本だった。この本も良く書けていたと思った記憶がある。

小池百合子という政治家は「乱」を好む人で、「乱」が起きればそれを利用して、「乱」がなければ自ら「乱」を作り、その乱の中で権力を得ようとする究極の自分ファーストの人のように思える小池を、私は元々醒めてみていた。『小池劇場の真実』を読んでからはテレビを通して聞く小池の発言の、裏を考えようとした。だが政界事情に疎い者にとっては深くはなかなか考えられない。後から読む記事で理解することの方が多かった。

ここしばらくは（３月２０日頃までは)、小池がテレビ等のマスコミに出るのは東京オリンピック関連が主であったように思う。出番は少なかった。私の脳内に占める位置は圧倒的に少なくなっていた。

新型コロナの影響で東京オリンピックの延期が決まったのは 3 月 24 日。それまで一桁台だった東京都の日々の感染者数は、前日の 23 日以降急激に増えて行く。都庁の HP を見ればよくわかる。そして以降急激に小池都知事のマスコミへの出番が多くなった。多くの人がオリンピック延期との関係を思ったに違いない。直前まで予定通りの開催を強調し、コロナのことはなかったが、ここぞとばかりに変身した。「感染爆発の重大局面」「ロックダウン」「九月入学論」「ホストクラブのホストに PCR 検査」「東京アラート」と発言は続くがそのフォローは少なく内容は空虚だ。思いつきなのか継続性がない。九月入学論をどこかの知事が言い出すと、小池も同調しアピールをはじめた。だが、自民党の部会が時間をかけて検討すべきこととなると、小池の発言は鳴りを潜めた。深い考えもなにもない。

こういった状況の最中に『女帝　小池百合子』を読んだ。7 月には都知事選があり、出版社は当然タイミングよく出版したいと思っていたのだろう。

小池に学歴詐称の疑いのあることは勿論知ってはいたが、政治家の能力とは無関係だろう位の感じでいた私は、この問題にあまり興味はなかった。

しかし、この本は違う。今の小池の出発点だというのである。「カイロ大学首席卒業」を世間を渡る武器にしてきたというのである。だが、この本は大学を卒業していないと明確にいう。カイロで小池と同居していた早川（仮名）という女性に会って話を聞いている。そういったことも含めて説明内容が極めて濃いのである。

一つ嘘をつくと、バレまいと思い、さらに嘘をつくことになる。それを繰り返すことになる。そればかりではない。小池の場合、明確に喋ったことを、マスコミが記録していることを、後日別の場面で、さも、何もなかったように簡単に否定し、相手を窮地に追い込む。これも繰り返される。環境大臣のとき、石綿による健康被害の問題で被害者は「嘘はいけないよ　小池大臣」と書いた横断幕を作って抗議している。これでは自分が自分でなくなるのではないかと思

うが、そういう感覚は小池には全くないのだろう。言わば虚飾の階段を平然と、確信犯的に登ってきている。

その時々の話題の中心になる政治家に近づき、取り入れられ、重用される。だが、その政治家の賞味期限が過ぎると、いとも簡単に反対の勢力になり平気で批判し、次の時流に乗ろうとする。それを繰り返す。百戦錬磨の強者の有名な政治家が、何故やすやすと小池に取り込まれてしまうのか不思議だ。警戒心の欠如か、脇の甘さか、色香に負けるのか。細川も小沢も小泉も。一番情けないのは前原誠司民進党代表ではないか。小池に手玉にとられ、民進党は瓦解する。

この本の内容は驚くことばかりだが、それだけではなく、不気味さも漂う。カイロで小池と同居していた早川さんは、小池が帰国するとき「あのね。私、日本に帰ったら本を書くつもり。でも、そこに早川さんのことは書かない。ごめんね。だってバレちゃうからね」といったという。勿論卒業のことだ。

多くのことを知っている早川さんは今もエジプトに住んでいて、小池が大臣に就任することを知ると「ふさぎこむようになった。事実を知っているという苦悩は、はっきりと恐怖へと形を変えた」「エジプトは、なんでもまかり通ってしまう軍事国家で、日本の莫大な経済援助を受けている。百合子さんは、その日本の大臣です。エジプトの高官や軍部と当然、つながっている。私は家の外に出るのが怖くなった。仕事に出かけようとして足が震え、『今日は休む』と連絡するようなことが続きました。友人たちには私の住所を、人にむやみに教えないでくれと頼んだ。誰かが私を探しに来ないかと怯えた。市場を歩いていてもバス停に並んでいても周囲を見回すようになった」とある。著者自身も「現在のエルシーシー大統領も軍部出身で、徹底した独裁政権の軍事国家であり、国立のカイロ大学も軍部の管理下にある。小池はエルシーシー大統領とも何度も面会している。そのような国に暮らす、小池の秘密を知る早川さんが、どれだけの恐怖の中にいるかを想像して欲しい」と書く。

本書を書くためには当然多くの取材が必要だった。インタビューを依頼したものの、恐怖から口をつぐんだ人も多いとも書かれている。

小池が小学 5 年生の時に校内の弁論大会で優勝したときの題は、「ウソも方便」だったという。既に何かを暗示するような大人びた題にも驚く。「ウソも方便」ぐらいの気持ちで戻れない階段を登ってきたのだろうか。小池の行き着く先は何処なのか、何を狙っているのか、それは都民や国民のためになるだろうかと思う。久し振りに大変興味深い本を読んだ。

（2020 年 6 月 15 日）